越後十日町　善光寺街道

ネオ昭和 からむし通信

■本　　社／〒949-8522 新潟県十日町市伊達甲 236　TEL（025）750-2857 FAX（025）750-2858
http://www.karamushi.jp/　E-mail cfy49400@nyc.odn.ne.jp　発行人／村山好明
■上越事務所／〒943-0804 新潟県上越市新光町 2-7-20　TEL080-5225-3318（所長：米山康久）

第７号〈越後アンギンの巻〉
発行／2009年11月7日

越後アンギンとは

アンギンというのは、からむし（青苧）、アカソ（赤苧）、ミヤマイラクサなどの繊維を原料として編まれた布で、法衣や敷物、袖なし、前掛け、袋などさまざまな用途に使われたようである。アンギンの語源は編衣（あみぎぬ）であり、阿弥衣という表記もある。

考古学の発掘調査の発展によって、アンギンが縄文時代人の衣料の主流であった事が明らかになってきたが、この古い技法を現代に伝えるアンギン製品や製作工具、製作技法が保存伝承されているのは、全国的に見ても新潟県だけなので越後アンギンと呼ばれている。

越後アンギンと言っても、アンギンの残っているのは県内一円ではなく、十日町市、津南町、旧松之山町、旧松代町を中心とする魚沼地方だけで、学術的にも極めて貴重なものである。名称も地域によって異なり中魚沼郡はアンギン、十日町市の山間部はマギン、旧松之山町や旧松代町ではバト（バトウ）と呼んでいる。

マギンというのは「馬衣」の意味で、アンギンが馬から鞍下から尻にかける布として使われていたのでマギンと呼ばれた。

アンギンを編む工具は簡単で、俵編みのようなケタとアミアシを組み合わせた用具と、タテ糸を巻きつけてケタに吊るし、移動させながら編んでいく用具としてのコモヅチの２つだけである。

ソデナシ（アンギン袖無し）十日町市博物館蔵　重文

越後アンギンの起源

古代人の作布技法には織布と編布の２種類がある。布を織る織物の原理は綜絖（そうこう）という工具を使ってタテ糸を交互に上げ下げして、その間にヨコ糸を通すという作業の繰り返しによって作布するものであり、綜絖がないと織物は出来ないと言われている。

一方、編物は１本の糸を編み棒で絡ませながら作布するか、またはタテ糸とヨコ糸を別々に用意して交互に絡ませて作布するという単純な作業なので、用具もケタとコモヅチがあれば良いので、発生史的には織物よりも編物が先行したというのが定説になっている。日本では、織物に必要な綜絖が約２０００年前の弥生時代に大陸から伝来してから織物が始まったと言われ、それ以前の縄文時代人の衣料は編物が中心であったことが、最近の遺跡の発掘調査で明らかになっている。

全国の縄文時代の遺跡から編物の遺品は出土しているが、織物の残欠は発見していない。現在までのところ編布の現物は次の９遺跡から出土している。

北海道斜里町朱円遺跡（縄文後期）
北海道小樽市忍路土場遺跡（縄文後期）
青森県木造町亀ヶ岡遺跡（縄文晩期）
秋田県五城目町中山遺跡（縄文晩期）
山形県高畠町押出町遺跡（縄文晩期）
宮城県一迫町山王遺跡（縄文晩期）
福島県三島町荒屋敷遺跡（縄文晩期）
石川県金沢市米泉遺跡（縄文晩期）
福井県三方町鳥浜貝塚（縄文晩期）

このうち最も古いのが鳥浜貝塚で、約６０００年前の縄文時代の前期の地層から編布が出土している。これらの異物の素材はアカソ、からむし、イラクサなどで、組織は「越後アンギン様編布」だと報告されているので、越後アンギンの歴史は６０００年前に遡る事が可能である。これらの出土資料によって、縄文人の衣料の主流はアンギンであり、数千年の長きにわたって伝承されてきた技術であることが判明している。

縄文人の衣料の中枢を占めていたアンギンも弥生時代以降綜絖の伝来によって織物と言う新技法が導入されると、編物よりもはるかに精巧な布を作る事のできる織物が衣料品の主流になる。編物は急速に衰退の一途を辿り、丈夫さや厚さなどの特性を生かした特殊な用途に限られて細々と技法が伝えられたと推測される。

その一例として有名なのが、時宗の僧侶が身に纏ったアンギンの法衣である。今から７００年ほど前に時宗を始めた一遍上人は、遊行のための野宿の夜衣などに兼用したと思われるアンギンの法衣を着ていた事が「一遍上人絵伝」の挿絵などによってしることが出来る。今でも柏崎市専称寺など全国９か寺の寺院にアンギンの法衣が残っており、これを阿弥衣と呼んでいる。

「軽くて丸洗い出来る」きもの
「締めやすい」帯

当社では長年気楽にお召しになれるきものを研究開発して参りましたが、カラーコンサルタント宮崎朋子先生のご指導により、色・デザインを企画考案し、この度からむし100％の「軽くて丸洗い出来るきもの」と「締めやすい帯」を発売することになりました。

きものをお召しになる場合、今までは「帯が締めにくい」「クリーニングなど面倒でお金がかかる」「高額で手が出せない」「職人さんの顔の見えるきものがほしい」等のご意見を多く頂きました。

出来るだけ多くの皆様に「からむし」の良さを知って頂くためには「着やすいきもの」「締めやすい帯」「適切な価格」でご提案し、しかも作り手である職人と買い手であるお客様と直にコミュニケーションを交わしながら作業を進めて行く事が重要と考え10年の歳月がかかりましたが漸く実現の運びとなりました。

絹織物に移り変わってから滅亡の危機に陥った「からむし織」は再び十日町で目を覚まし始めたのです。

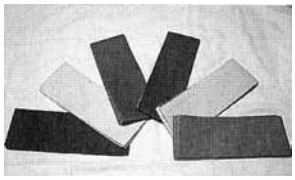
お客様と入念にお話をしながらお召し物を作らせていただくことが当社の使命と心得ております。

春夏秋冬と四季に恵まれた素晴らしい町十日町の工房へぜひ見学にお越し下さい。

心よりお待ち申し上げております。

からむし100％の着物・帯

ネオ昭和が開発
「天地人」ブームに乗る



衣料品企画販売のネオ昭和（十日町市、村山好明社長）は、上杉謙信や直江兼続が生産を奨励したイラクサ科の「からむし」を100％使用した着物を開発した。製法や販路を工夫し、低価格で販売できるようにした。NHK大河ドラマ「天地人」の影響で、からむしの認知度は高まっている。着心地の良さなどをアピールし、販売につなげる。

開発したのは、からむしで織った友禅染の着物と帯＝写真。これまでは日光に当たると色が薄くなるなど、からむしの生地に友禅染を施すのは難しいとされてきたが、染料を工夫してこれを可能にした。

着物を織る工程についても、新潟県内の企業と協力して従来よりも広い幅で織る手法を開発。一度に多くの着物を作れるようにしてコストダウンを図った。

価格は着物が12万6000円、帯が2万6250円。5種類のデザインと7色の色を用意し、顧客の要望によって組み合わせることができる。全国の呉服の展示会などで販売する。今年中に着物30着と帯100本の販売を目指す。

日本経済新聞
2009年9月1日㈫朝刊掲載記事より

赤坂サカス広場で、からむし麺の試食販売

9月12日から13日の2日間TBS主催の「サカス・マルシェ」イベントに「からむし麺」を出品しました。

「からむし」を知らない方がほとんどでしたが試食して頂いたところ「讃岐うどんと違うけど美味しい」、「これはうどんですか美味しいですね」、「もちもち感があって美味しいですね」という嬉しい評価を頂きました。雨の中わざわざおいで頂きお買い上げ下さいまして誠にありがとうございました。

また、TBSの新名さん始め社員の皆さん、隣のブースの「豊の会」の皆さんには多大なるご協力を頂きました。今後とも何卒よろしくお願い致します。

9月12日～13日赤坂サカスでTBS主催「サカス・マルシェ」イベントが開催されました。「からむし麺」が巨大モニターで映し出されました。

「えちご」で繋がる、からむしと色
～えちごなないろ～によせて

カラーコンサルタント　宮崎　朋子さん

いにしえの「えちご」はどのような景色だったのでしょう？

山の色は、木々の種類で、海の色は緯度で大きく見え方を変えます。私は、9年前に、東京から生まれ故郷である上越に戻り、久々に見る赤いトタン屋根や、夏の杉林の深い緑に心を救われました。そしていつか、それを色で表現したいという思いがございました。「えちごなないろ」は、こうした私の長年の夢と、「からむし」という新潟県がほこる素材とが出会ってできたブランドです。

えちごの春を代表するのは「桜色」。これは、雪国に生まれた者が心待ちにしている、桜並木を表現しています。夏は「杉山」と題して濃く変わっていく杉林を表現いたしました。もうひとつ、私達日本海側に住む人間が自慢できるのが「夕映」です。

えちごの秋は、収穫を迎え、華やぐ気持ちを「美野里色」という艶やかな赤紫で表現しています。もう一つ、忘れてはならないのが「稲穂」です。これは、やわらかい黄金色で表現いたしました。佐渡の「朱鷺」色は、いにしえより続く「からむし」の技術とかけて「時色」と表現しています。ブランドカラーは、雪の色と「からむし」の緑をかけ合わせて「藍白」に墨文字で、モダンでシンプルな印象をアピールしています。

商品としてのもう1つの特徴は、「パーソナルカラー」の理論を取り入れた点でございます。「パーソナルカラー」とは、お客様のお顔に映え、若々しくイキイキと見える色のグループをいいます。これは、色合わせを楽しむきものの世界には、特に必要な理論であると私は考えています。

「からむし」の半幅帯は、その理論を応用し、ブランドカラーを除く6色が、リバーシブル展開で36パターンのカラーコーディネートを楽しむことが出来ます。

こうして、この度、商品制作に関わらせて頂くこととなりました。素材である「からむし」も、「色彩」も、全ては、「えちご」を元気にクローズアップさせたいという思いからきています。

この帯を締めて頂くお客様にはどうぞ、そんな私どもの思いを感じて頂けたら嬉しく存じます。